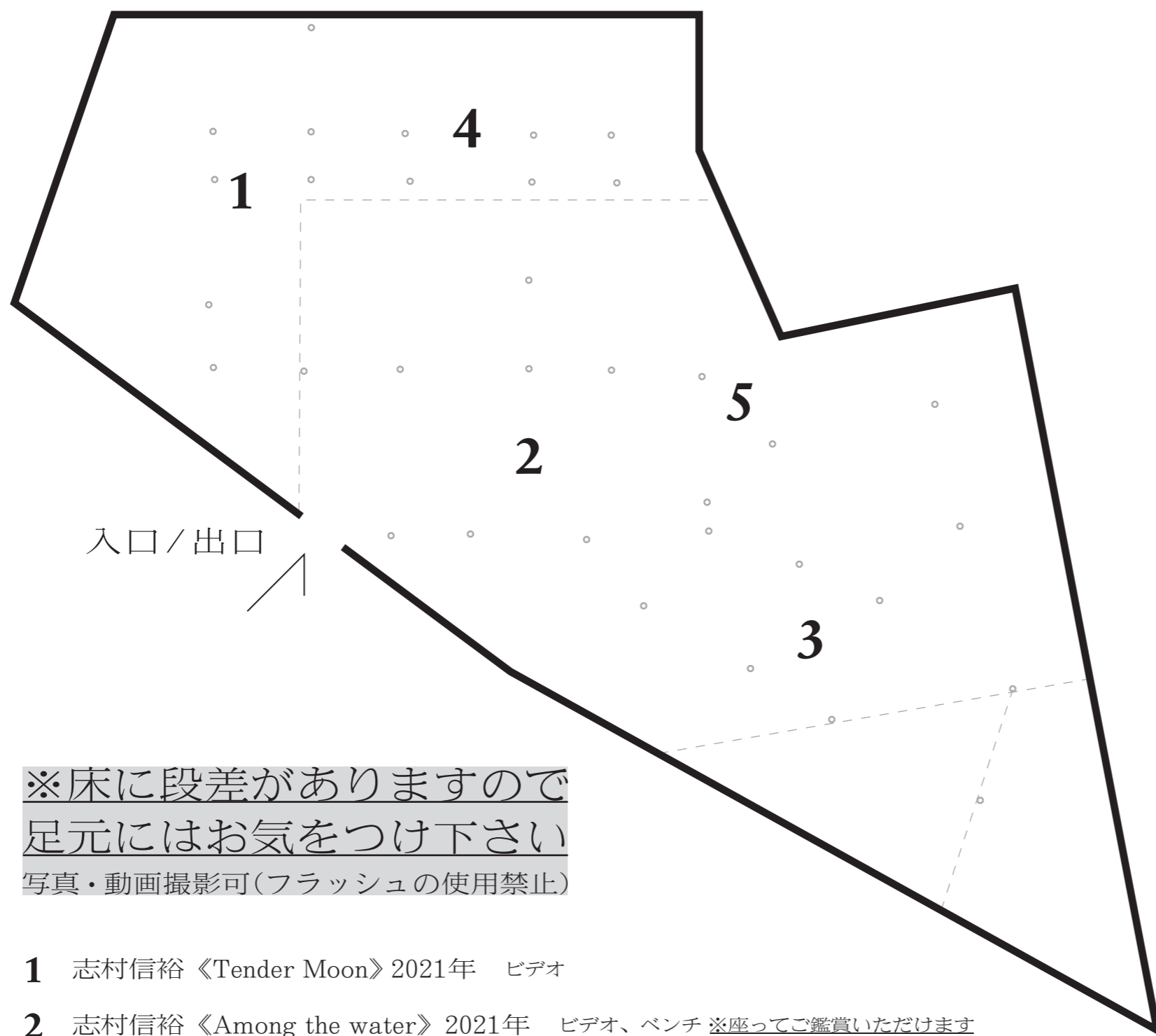


香取・アート・タイム

[与倉屋大土蔵]

香取市佐原イ 1730

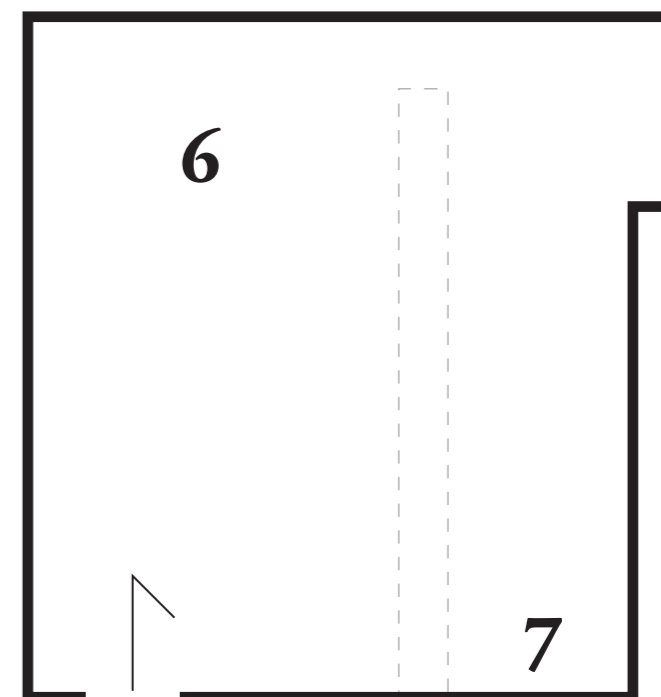


※床に段差がありますので
足元にはお気をつけ下さい
写真・動画撮影可(フラッシュの使用禁止)

- 1 志村信裕 《Tender Moon》2021年 ビデオ
- 2 志村信裕 《Among the water》2021年 ビデオ、ベンチ ※座ってご鑑賞いただけます
- 3 志村信裕 《^{はり}玻璃の夢》2021年 ビデオ、古い窓ガラス
- 4 松田光雅 《香取神宮軍神祭》1930年 16ミリフィルムをビデオに変換、9分、サイレント
- 5 松田光雅 《水郷を行く》1959年 16ミリフィルムをビデオに変換、11分、サイレント
※オリジナルのフィルムにはサウンドトラックが入っていたが、今回の展示では演出のため、サイレントでの上映とした

[佐原三菱館]

香取市佐原イ 1903-1



入口/出口

- 6 志村信裕 《bucket garden》2012年
ビデオ、バケツ、水、水彩絵具
- 7 松田光雅 《佐原夏祭》1937年
16ミリフィルムをビデオに変換、8分、サイレント

故・松田光雅氏の撮影した映像は、香取市役所に寄贈されている
16ミリフィルムから抜粋し、今展覧会のためにデジタル化した

2024
6.1^土
|
6.16^日
10:00~16:00

展示構成：志村信裕
展示設営：trnk

香取市
KATORI



千葉県誕生150周年
記念事業

松田光雅の生涯

佐原の写真家・松田光雅さんのことを知ったのは偶然だった。

この展覧会の下見のために訪れた佐原町並み交流館で、小さなモニターに昔のフィルムが上映されていることに気がついた。佐原のお祭を記録したモノクロの映像だったが、わずか数カットを観ただけで、上手いなと思った。一目で惹かれる映像だったので、誰が撮ったのか気になった。モニターの脇に松田光雅撮影とだけ記されている。アーティストの勘のようなものが働いたのか、僕は下見そっちのけで松田さんのことが急に気になってしまった。その後、市役所の人達にも協力してもらって、松田さんの来歴について調べ始めることになる。

大正十二年から昭和五十七年までの約六十年間、佐原の羽衣写真館で写真家として働きながら、地域のお祭や、日常を個人で撮影してきたことがわかった。没後、松田さんが撮りためたフィルムは香取市役所に寄贈された。個人的に興味深かったのは、松田さんの出身が石川県だということだった。きっと地元出身者ではないからこそ、佐原の風景や風習をまっさらで新鮮な視点から、長い間、フィルムで残しつつづけてきたのではないだろうか。

僕が松田さんの映像に惹かれたのは、そうした外部からの「まなざし」に対して、共感できたからかもしれない。香取市に保存されている松田さんのフィルムは七時間を超える。全ての映像を観た僕は、松田さんが残した映像を展覧会で展示しようと決めた。香取市が企画した展覧会のテーマに、これ以上ふさわしい作品はないからだ。新しい作品をつくることも大切だけど、眠っている地域資源を掘り起こし、公開することはもっと重要だと思う。

展示の構成を考えるために、松田さんの人物像が知りたかった。生前に親交のあった市民がいなくも市役所の担当者に頼んで探してもらった。しかし三十年以上も前に亡くなられた松田さんについて知る人も、ほとんどの方がすでに鬼籍に入られていた。それでも幸運なことに、旧佐原市文化協会映像部に所属していた鈴木栄司さんから唯一、松田さんとの思い出を聞くことができた。鈴木さんは、佐原で一番の写真家だった松田さんのことを「光雅（こうが）先生」と敬うように呼び、今でも心の底から尊敬しているのがわかった。

鈴木さんに、松田さんのフィルムのなかでも代表作に違いない「水郷を行く」（一九五九年）を観てもらった。「こんな素晴らしい映像は永遠に作れねえ」と鈴木さんが目を細めながら言ったのが忘れられない。僕もそう思う。こんな素晴らしい映像は永遠に作れないと。

佐原に松田光雅さんという、地域の記録を残した写真家がいたことを、一人でも多くの人に知ってもらいたい。

香取市という場所

香取市には二〇一九年の夏に引っ越してきた。縁あって、小見川のとある古民家に住まわせてもらっている。東京の郊外に生まれ育った僕は、都内の美大を卒業後に横浜、山口、パリ、佐倉と拠点を移しながら作家活動を続けてきた。色々なタイプの作家がいるが、こんなに住む場所を転々と変える作家も珍しいと我ながら思う。どの街にも、だいたい一年や二年、長くても三年毎に移動してきたが、香取市に住んでからはもう五年目になる。国内外の色々な街に住んできたけれど、香取市は特に生活がしやすく、制作に集中できる日々を過ごせている。

香取市に住み始めてから、つくる作品に変化がありましたか？と人から質問されることがある。

これは持論だけど、作品制作というのは住む環境からの影響を、確実に受ける。

具体的には、その場所に流れる「時間感覚」がもっとも作品に作用すると思う。僕の場合、山や田んぼが身近にあることで、自然界の微細な変化に敏感になったし、季節や時間の濃淡が以前よりも、よく見えるようになった。この土地の「時間感覚」という目には見えないリズムは、自分が今つくりたいと思う作品の土台を支えてくれる。今回の展示会場の一つ、与倉屋大土蔵では、香取市に拠点を移してから制作した最近の作品を展示している。月や水の運動、生命を感じさせるこれらの作品は、間接的に香取市という場所の心象風景のようにも映るだろう。

時間について

僕は作品をつくる仕事が仕事だから、時間についてはいつも考えている。

新しい作品も、時間が経てば当然古くなる。だけど時間に抗うように、古びない作品をつくりたいと思っている。一瞬で話題になってしまうような、分かりやすく消費されてしまう、広告みたいな表現はしたくない。

理想とするのは、十年、二十年後も、出来ることならば百年後も飽きられずに、人の心に残るような作品だ。そんな普遍的な作品をつくりたい僕にとっては、変わるものよりも、変わらないものの方が魅力的に見える。

最先端なものよりも、時代遅れとされているものにこそ、よく目を凝らせば、ずっと価値があることがよくある。僕がやりたいことは、作品づくりを通して、そうした埋もれていた、忘れられていた価値を再発見することだ。だから時間について考えることは、身近にある価値について、改めて考えることと同義だと思う。

これからも焦らずに、何度も繰り返し観たいと思えるような作品を一つずつ、自分のペースでつくれたら幸せだ。



松田光雅「佐原夏祭」1937年

松田光雅（まつだ みつまさ）

写真家

1900年石川県生まれ、1992年逝去。

1923年から佐原に羽衣写真館を開館。アマチュアムービーカメラマンとして地域の行事や風景を16ミリや8ミリフィルムで記録してきた。

【参考文献】

「佐原に生きる」日本図書刊行会、1989年

松田光雅氏についての短いインタビュー記事が掲載されています。

現在は絶版ですが、香取市立図書館にあるので読んでみてください。

志村信裕（しむら のぶひろ）

アーティスト

1982年東京都生まれ。現在、千葉県香取市を拠点に活動。

2007年武蔵野美術大学大学院映像コース修了。2016年から2018年まで文化庁新進芸術家海外研修制度により、フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO) の客員研究員としてパリに滞在。身近な日用品や風景を題材にした映像インスタレーションから、近年では各地でのフィールドワークを元に、ドキュメンタリー的手法を取り入れた映像作品を制作。ローカルな視点から、可視化され難い社会問題や歴史に焦点をあてるプロジェクトを手がける。近年の主な個展に「Afternote 山口市 映画館の歴史」山口情報芸術センター〔YCAM〕（山口市、2023-24年）、「水影」いなえ（香取市、2022年）、「残照」千葉県立美術館（千葉市、2019年）などがある。